



No. '24-3

(No.118)

July. 2024

# ISGG NEWSLETTER

## 伊東市善意通訳の会

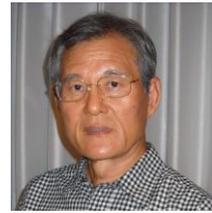
### C O N T E N T S

1. ISGG 会長に就任して	会長 主原一雄	2
2. シックスセンス	菊池善次郎	3
3. デンマーク人の伊東ホームステイ体験	小西恒男	7
4. 35日間航空機世界一周の旅（後編）	野満勝次	13
【新入会員紹介】	レネ 紗矢香	17
【事務局便り】		17
【編集後記】		18



英語サロンでの Kyle 送別会

## ISGG 会長に就任して



会長 主原 一雄

永年 ISGG の会長として活躍していただいた稲葉尚子さんの後任に今期から就任する事になりました主原一雄です。伊豆には妻とゴルフを楽しみに年に数回訪れていましたが、2011年に現在住んでいる伊豆高原に家を購入することになりました。その後2013年、定年退職を機に東京の家を売却し妻、義母そして3匹のワンちゃんと伊東に移住してきました。移住して直ぐにワンちゃんをもう一匹購入し、これも移住してから手に入れたキャンピングカーで全国を旅行して回りました。

只、定年後に強く希望していたのは私の多くの友人が若い頃及び定年後に行っているボランティア活動でした。それで伊東移住後、伊東国際交流協会、伊東市善意通訳の会及び東京の Bridge Asia Japan に入会しました。又、東日本大震災復興のボランティアとして5年間年に数回1週間単位で主に南三陸町にてがれき処理や地域産業補助等を行いました。

伊東市善意通訳の会では年に数回ガイドをする程度で余りアクティブな会員とは言えなかったですが、前期に事務局長を永年務められた小西恒男さんの後任を務めさせていただきました。

会長就任にあたって特に抱負とかではありませんがとにかく全会員が楽しめてやりがいを感じる活動を続けていければと思います。当会のメイン活動である外国人へのガイドは数は減っていますが、やりがいのある活動です。私も8年前にインドから東京に転勤できた女性をガイドし、1年後には彼女と彼女の同僚、そしてその翌年には彼女とインドから観光で来日した兄夫婦を案内しました。彼女は4年前に帰国しましたが丁寧なメールを受け取りガイドした以上の喜びを得ました。多くの会員の皆さんもガイドにあたって同様の経験をされていると聞いています。今後ともガイド活動は積極的に続けていきたいですね。そして当会のガイドに並ぶもう一つの主要活動が地域での国際親善活動で

す。 具体的なプログラムとしては英語講演会、英語サロンそして K 's サロンがあります。どれも伊東を訪問及び在住している外国人の方との交流を通じての伊東のイメージ向上、そして伊東市民への国際親善機会寄与に貢献していると自負しております。 もちろん以前からの黒船祭、按針祭、按針生誕祭等での通訳等も大事な活動です。

前述にも記しましたが、当会の全会員が楽しめてやりがいを感じる活動を続けていけるように頑張りたいと思います。 よろしく願いいたします。

## シックス センス



菊池善次郎

ブルース・ウィールズ主演のアメリカ映画（1999年）の話ではありません。退職前の11年間、私は陸上勤務し「船舶管理」の仕事をしていました。その時会社に勤めていたフィリピン人スタッフ（船長）が来日して1ヶ月目に亡くなると云う事件があったのですがその時の話です。

「船舶管理」とは聞きなれない言葉かもしれませんが、一言で云うと「従来の船会社の仕事を分業・分社化し、子会社を作ってそこに業務を任せると云う海運経営のやり方（現在世界の殆どの船会社がこの方式）の中で、例えば『外国船員の配乗業務』とか『船舶の保守・整備業務』などを行う」ことです。

会社が担当していた船舶は約50隻（1万トンクラス貨物船から25万トンクラスタンカーまで各種あり、それらの乗組員（船長、航海士、機関士、甲板員などなど）は7割がフィリピン人船員でした。



MV Oji Universe (Wood-chip carrier)

38,679 トン 乗組員 21 名 全員フィリピン人

Captain TARAY が訪船・アテンドした担当船（例）

乗組員への会社方針の徹底や疾病・トラブル処理など乗組員ケアは会社として時間と労力を必要としました。この為にコーディネーションオフィサーとして会社に一人フィリピン人を雇うことにしました。早速、フィリピン人船員リクルートに現場マニラで活動している Manning Agent（代理店）NYK-Filship 社に依頼し、候補者の中からタライ船長(Captain Taray)を選びました。40才。男性。船長経験あり。

1991年12月3日来日。単身赴任。居所としてJR蒲田駅（東京大田区）に近いアパートを手配。会社は大森（大田区）にあり、通勤は便利。しかもアパート1階がスーパーになっていて食べることに便利。彼には管理船（会社が管理を担当している船）が東京、横浜、川崎、その他日本の港に入った時、訪船し乗組員ケアをしてもらいました。彼はまじめで几帳面な人柄で訪船レポートもしっかり書き、要を得ていました。又、社内では「タラちゃん、タラちゃん」と呼ばれ、みんなから愛されていました。

翌年1992年1月6日、正月明け社員の初出社の日です。朝9時、それぞれ新年の挨拶が済んで各自通常業務につきましたが、タライ船長がいないことが分かりました。いつもなら彼は朝9時前には必ず出社するのですが、その日は10時になっても何の連絡もなし。彼の住むアパートの管理人に電話し部屋をチェックしてもらうことにしました。すぐ折り返し電話があり、『タライさんが自室のベットの傍で亡くなられていました・・・』とのこと。予期せぬ悲しい知らせでした。

私がアパートに駆けつけ時には既に警察による現場検証も略済んでいました。警察によると「事件性なし」、「突然の病死（高血圧症疾患）と考える」、「死後3～4日経過」というものでした。

さて、それからが大変でした。何しろこんなことは初めての経験でしたので。マニラ NYK-Filship 社や家族への連絡、遺体取扱業者（遺体の搬出/衛生保全処置/マニラへの空輸など）の手配、監察医務院（東京都文京区）での遺体解剖/死因精査/死亡診断書作成、遺留品のチェックとリスト作成、顛末報告書作成、フィリピン大使館への報告と書類作成、雇用保険/社会保険/生命保険等保険処理手続、等々。

当時はまだテレックス、ファックス、ワープロの時代で今の様にインターネットで知らないことをすぐ調べることも出来ず、仕事関係の業者からいろいろ情報を得ての対応でした。中でもタライ家はカトリックのため勿論火葬は不可、遺体をそのままマニラまで移送する必要がありました。三特興業社（東京中央区）という業者を見つけ遺体の衛生保全処置（エンバーミングと云うらしい）から納棺、マニラへの遺体の空輸まで全面的にお世話になりました。

因みに「エンバーミング」という言葉は最近になって知りました。通常、人が亡くなると火葬する日までドライアイスで遺体を冷し腐敗を防ぎますが、最近は亡くなってからも故人が美しく見え、顔も生き生きしている様に見える為に血管の血を全て抜いて別の防腐液を血管に注入すると云うエンバーミングをするのが流行っているとか。

いろいろ諸手続に時間を要しましたが、1月10日遺体の納められた<sup>ひつぎ</sup>棺と共に同じ飛行機で私もマニラに飛びました。NYK-Filship 社社長と一緒にマニラ市内の Funeral Parlor でタライ船長の家族と会い、亡くなった時の状況やその前後の話を詳しく説明し安らかな眠りをお祈り申し上げた次第です。

翌日、同じ Funeral Parlor で行われた葬儀に参列。その日の夕方の飛行機で東京に戻りました。

タライ船長の急死事件の後始末が一段落して1ヶ月余りが経った2月中旬、会社の机の上の電話が鳴りました。Long-distance call だと。相手は女性でアメリカ Los Angeles から私を名指しでかけてきていました。何事だろうと一瞬身構えましたが、すぐ用件は分かりました。

「私はアメリカで弁護士をやっているフィリピン人のペロニーク タライと云います。実はそちらで働いていた Captain Taray は私の一番下の弟です。彼の死についてマニラの実家から連絡は受けていますが、・・・実は、率直に云って、これまで弟の給料で妻や子供や年老いた両親も、また親戚一同が生活をしてきたところです。彼の亡き後、これから先どうなるのかと心配で、遠いアメリカの地で一人やきもきしています。そんな時、私のシックスセンスが『日本にキクチさんと云う人がいる。彼は正直でいい人です。彼とコンタクトを取りなさい・・・』、と告げたのでこうして電話をかけているのです・・・」

(原文) ; 「My sixth sense told me, Captain Kikuchi is in Japan. He is a good & honest person. Contact him. He may help you. . . . .」

要するに彼女の電話は日本で働いていたタライ船長の死亡保険関係はどうなっているのでしょうか？を確認したかった電話でした。当初は彼女の電話の声は低く、小さく、時々ため息を漏らしながらの暗いトーンでした。私は「会社は日本の法律に規定された雇用保険、社会保険等は全て付保しておりました。その他にも会社独自の保険をタライ船長にはかけてきました。保険庁（当時）、保険会社、フィリピン大使館とも連絡をとり、手続きは少し遅れている様ですが保険金の全額（おおよその金額も示

す) がマニラの家族に支払われます。家族もその旨了解/了承しています」そんな主旨で説明しました。

その途端に彼女の声がガラリと変わり「やっぱり電話してよかった。センキュー、センキュー」。

そして電話は切れました。

それから後、マニラとも連絡したのでしょうか、彼女からもう一度こちらの葬儀を含めた誠意ある対応への感謝の電話がありました。

シックス センス。直観、第六感、人間の持つ五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）以外のもう一つの基本的感覚、などと説明されています。英語の辞書を調べると靈感、虫の知らせ、自分の身の中には無い外の何かの知らせ/お告げ、天の声、などもあるようです。

ベロニーク タライさんが見ず知らずの私との会話の切り出しに使った「My sixth sense told me」はどう云う意味で使ったんだろう。ずいぶん私を持ち上げた話の切り出しでしたが悪い気はしませんでした。切実な問題（ベロニークさんにとって）の話の切り出しとしてはユーモアを感じました。見ず知らずの人からいきなり「あれ、どうなってるんだ？」と云われるよりは遥かにフレンドリーに話ができること間違いないと思いました。ユーモアはやはり外国人にはかないません。

その年の7月、また出張でマニラに行く機会がありました。丁度いい機会なのでタライ船長の墓参り

をすることにしました。代理店(NYK-Filship 社)のスタッフが車を運転、マニラ中心街から南に約1時間、緑に囲まれた公園の様な美しい墓地にタライ船長は眠っていました。平たい四角い石を地面に置いた形の墓でした。途中で買った花を墓石の傍に供え、改めて安らかな眠りを祈りました。



マニラ郊外の市営墓地（イメージ）

代理店 NYK-FILSHIP 社によると、タライ船長の

葬儀に関し日本側の誠意ある対応に家族・親戚一同、大変感謝しているとのことでした。また、死亡保険金関連のお金も滞りなく支払われているとのことでした。

## デンマーク人の伊東ホームステイ体験



小 西 恒 男

5月18日（土）から20日（月）までの4日間、デンマーク人11名が伊東を訪問し、伊東観光、日本文化体験など伊東市民と交流を行った。

これはPTPIという組織のデンマーク支部から日本支部を通じてPTPI伊東にホームステイの受け入れを打診したものである。PTPI伊東の母体である伊東ホームステイボランティアの会（IHCI）が受け入れを承諾し、計画を進めた。

PTPIについて People To People International の略称

1956年、ドワイト・D・アイゼンハワー／アメリカ第34代大統領の提唱により発足した民間の非営利国際交流団体で、国際本部はミズリー州／カンザスシティにある。歴代のアメリカ大統領を名誉総裁として「世界中の人と人の触れ合いが相互理解と世界平和への最善の道である」をモットーに現在135か国が加盟し教育、文化、交流活動を通し国際交流を図ることを目的に活動している。

日本では千葉、東京、静岡（伊東他）、山梨、岐阜、沖縄など10支部（チャプターと呼称）が加盟。日本の本部は菊川（静岡県）にある。

今年2月の初め頃、石田寿子さんよりデンマークから伊東へのホームステイの打診があり、受けようと思う、と連絡があった。日程は5月中旬の4日間、人数は7名とのこと。久しぶりの外国人受け入れで、「受け入れ先は？」と聞くと「大丈夫」との返事。それでは受け入れOKで返事しようと話し合った。

3月になってPTPI伊東チャプターの山岸涼子会長にデンマークの資料が届いた。人数は11名で女性10名、男性1名である。（1組が夫婦）日程は5/4に沖縄入りし、PTPIチャプターに面倒を見てもらいながら福岡、岩国、広島、奈良、京都に滞在し、日本を楽しむという計画。5/18（金）に京都を出発し伊東入り、3泊して5/21伊東を出発し東京方面に移動し3日間を横浜、東京で過ごし帰国する3週間の旅行である。

資料の11人の顔写真を見て思わず笑った。彼らの年齢が60代、70代で最高齢は79歳の女性である。リーダーはMrs. Gunild Bogdahlさん（71歳、Gさんと呼ぶ）である。

以後Gさんとは私が窓口になってメールのやり取りをすることになる。「初めまして、私が窓口の小西です」とメールすると「小西さん、私はあなたを知っています。去年を覚えていますか？」と返事が来た。

思い出した。実はこの企画は昨年にも計画されていてGさんと何回かメール連絡した際、去年はコロナ禍の影響で日本のホテルが予約出来なくて中止した経緯があった。

4月中頃石田さんが資料を持って訪ねてきた。伊東でのスケジュールと活動を詳細に作成したものである。いつもながら石田さんの行動力の速さには驚かされる。これを英訳して先方に概要を送って欲しいとのことで後日送付しておいた。

今回全く偶然であるが、この時期伊東市の重大イベントである「伊東祐親祭」と合致した。デンマークの人にとっては珍しい体験となるが、観光客が多くなりスケジュールに影響が出ないか心配でもある。

デンマーク人のスケジュールは概略次のとおりである。

- 5 / 18 (金) 夕方伊東駅到着 駅でホストファミリーに引き渡し
- 5 / 19 (土) 午前 大室山、城ヶ崎海岸観光 午後 書道体験  
夕食後祐親祭見学
- 5 / 20 (日) 午前 日本文化体験 (華道、琴、着物着付けなど)  
午後 料理体験 (押し寿司、巻きずし、天ぷら、たこ焼き、そばなど)  
料理で歓迎パーティ  
パーティ終了後、祐親祭見学
- 5 / 21 (月) 午前 介護センター訪問後、伊東駅へ

この中で5 / 20の全行事に通訳が必要となり、ISGGの出番となる。

石田さんから主原会長へ依頼した。もちろん返事はYESで、日本文化体験、日本料理の通訳にメンバー多数が協力することになった。(主原会長、加茂野、小松夫妻、相良、曾我、加藤(達)、加藤(守)小西)

なお、19日の観光はIHCIメンバーでもある加藤(達)、加藤(守)、小西の3人が案内役を勤めることにした。

5 / 4 デンマーク一行が沖縄に無事到着した。以後スケジュール通り滞在を楽しんでいる様子である。伊東訪問が近づくにつれ、到着時間の連絡がないままヤキモキした。

直前になって午前中に伊東駅に到着との連絡が入った。石田さんから心配の連絡があったが、私としてはプレゼンの時間が欲しかったので、その時間を貰うよう提案し、市役所の会議室を手配するよう依頼した。

## 第1日目

5/18 昼前、デンマーク一行の出迎えのため伊東駅で待っていると、加藤守康さんが改札から出て来たのでびっくりした。黒船祭のイベントが中止になり戻ってきたとのこと。加藤さんにはそのまま予定に入ってもらうことにした。

時間通り11名が現れる。全員を伊東市役所会議室に案内した。

昼食を食べながら相互で自己紹介した。全員が落ち着いたところで伊東で過ごす4日間の活動予定を説明した。特に祐親祭と重なったので、伊東祐親について説明。敷地内にあるブロンズの祐親像を見学した。

2時間ほど打合せを行った後、ホストファミリーに来てもらい、引き渡しを行った。デンマークのゲストは長旅にもかかわらず（年齢の割に）全員元気な様子であった。

オリエンテーションの間、CVA（ローカルTV）が来てインタビューなどビデオ撮影をしてくれた。

ホストファミリーが出迎えに来る間を利用して、役所内を案内した。7階の市長室を突然訪問した。秘書課の人が機転を利かせてくれ、応接室に入れてくれた。ゲストの皆さんは応接室から見下ろす市内の景色を喜んでくれた。



市役所前で 全員で記念撮影

## 第2日目 観光と書道体験

午前9時大室山の駐車場に集合。前日5軒のホストファミリー宅にステイした全員が時間通り集まった。今日は土曜日で、予想通り観光客は既に50人程度並んで待っていた。

リフトで山頂へ。今日の案内役は加藤達雄さん、加藤守康さんと私である。山頂で加藤（守）さんが全体説明を行い、お鉢巡りを始めた。服装、足周りは昨日の市役所と殆んど変化はなかった（半数以上はサンダル）。皆ゆっくりと自由気ままに歩いて山頂一周を楽しんでもらった。ゲストにとって印象的だったのは白雪を残した富士山の雄姿であっただろう。記念撮影のスポットで写真を撮ったが、1名の行方が分からず、10名となった。



大室山山頂、十名で記念撮影。  
バックに富士山の雄姿が……。

リフトで駐車場に戻りホストファミリーと合流し、昼食に向かった。

昼食後、城ヶ崎海岸に行き景観を楽しんだ。長く続く溶岩の海岸線に関心を示し、門脇の吊り橋を渡りながら楽しそうであった。

デンマークの人達は我々日本人が考えるほど説明は要らないようである。城ヶ崎海岸入り口で概要説明をすることを事前に話していたが、各人がドンドン先に行くので、リーダーに頼んで戻ってもらい説明を行った。こちらは親切心で考えているが、先方はそれほど望んでいない様子である。ここでは情報の押しつけはしないようにして、各人自由に楽しんでもらうことにした。

次の予定は市内に戻りHさん宅で書道体験である。ホストファミリーの予定で9人が体験する。HさんはIHCIの会員であり、書道の先生である。教える都合で9人を2グループに分けて実施する。時間は1時間程度。H宅に行くと机に4人分の書道具がセットされ、準備は整っていた。椅子に座り筆の持ち方から墨の付け方など基本を教えてもらい、漢字を選んで半紙に書いていった。そして最後に色紙を貰い、そこに習った漢字を書いて仕上げとした。同じ要領で2組目も体験してもらった。各人によって得意、不得意があったが全員上手に仕上げる事が出来、自筆の色紙をお土産として持ち帰った。全員貴重な体験に感謝していた。

ゲストは一旦家庭に帰り、夕食後祐親祭の会場に出掛ける予定であったが、リーダーのGさんに打診したところ、疲れたので遠慮したいとのことであった。大体の人が疲れのためホストファミリーと過ごしたいとのことだったので、私は会場から帰ろうとした矢先、Sさんが女性2名と来たのに遭遇した。今日は祭のメイン行事である薪能、と狂言が見られる。松川の水上市特設舞台でかがり火のもと、運よく能と狂言を見ることが出来た。

内容は難しく理解は出来ないだろうが、幽玄な雰囲気の中、日本の伝統芸能を鑑賞できたことは貴重な体験だっただろうと思われる。後で聞いたところ石田さんもゲスト3人を連れて見学していたとのこと。場所が違ったのでお互い確認できなかったようである。

2日目も無事終了した。

### 3日目 日本文化及び日本料理体験

午前中は東海館（伊東市の文化施設）で日本文化を体験した。

午前8時半にISGGとIHCIの関係者が集まり、中広間を使って日本文化体験のセッティングを行った。部屋の4隅に華道、琴、着物着付け、折り紙のスペースを作った。

各コーナーにISGGの通訳を置いて通訳が講師の説明を伝えるよう手配している。

午前9時過ぎ体験開始。ゲストを4グループ（A B C D班）に分け、各コーナーで体験が始まった。1体験を30分とし、ローテーション方式で全員が全部の体験をする計画である。

体験が済んだゲストを館内する役目を加藤（達）さんと加藤（守）さんが実行してくれた。着物姿が気に入って館内を着物で回った人もいたそうである。賑やかなうちに文化体験は終了した。

午後は個人宅を訪問し茶道体験を行った。一碧湖湖畔のYさん宅で茶道体験をしてもらった。

一方日本料理のほうは、市の施設である健康福祉センターの厨房を借用して料理を作った。

午後1時過ぎ料理担当のリーダーとそのグループが集まり、材料などを準備する。

各料理のリーダーは日頃から石田さんと親交のある人達で、大変協力的な人達である。

午後4時、茶道を終えてきたゲストが会場に到着する頃、会場設営はほぼ出来上がっていた。人数は50名位と聞いていたが、石田さんからもう少し増やしてほしいとのことで、ぎりぎり54席を準備した。

ゲスト11名を5班に分け、その班で料理体験をしてもらい、更にISGGメンバーに通訳として入ってもらい、各グループで料理60人分を作ってもらった。

料理は ・巻きずし ・押し寿司 ・天ぷら ・たこ焼き ・そばとうどん

の5種類である。

途中で盛り付け用の紙皿が足りなくなったとの連絡があり、私が慌てて百円ショップで買って来るという一幕もあった。

料理が完成すると紙皿に盛り付け、全員でテーブルに運び始め、パーティの準備が整って来た。

パーティ開始の5時を少し過ぎたところで全員の料理が完成、いよいよパーティの運びとなった。

人数は関係者とデンマークゲスト11名、それにPTPI日本・本部から中島会長と事務局の2名が加わり、総勢54名となった。

石田さんの司会でパーティを始め、通訳は小西が担当した。

デンマークグループの歓迎の挨拶、デンマークのリーダーGさんの謝辞、各団体の逐次紹介などを行った後、食事会となり、作った料理を楽しみながら各テーブルで歓談が行われた。知り合いのミュージシャンをゲスト招いて音楽を披露したり、社交ダンスなどでデンマークの人と一緒にあってひと時を楽しんだ。

大変思い出深い歓迎会になったのではなかろうか。

#### 4日目 介護施設訪問

最終日は伊東駅発11時08分の電車で東京へ行く予定である。

出発までに時間があるということで、石田さんの計らいで「伊豆介護センター」を訪問した。デンマークのメンバー数人が介護の仕事をしているとの情報があったそうである。

9時に伊豆介護センターに集合し、介護の様子を見学させてもらうことになった。

伊豆介護センター社長の母親が昨日押し寿司のリーダーを勤めてくれた稲葉博子さんで、稲葉さんが応じてくれたとのことである。

「伊豆介護センター」は東京パラリンピックの金メダリスト杉村選手の職場であることは良く知られている。

センターの責任者からセンターについて概要を説明してもらい、更に実際の現場で実施している介護の体験をさせて貰った。約1時間の訪問であったが、デンマークの人にとって日本の介護状況を知ることが出来たのは大変良かったと思われる。

時間になり、別れを告げて伊東駅に向かった。伊東駅では駅構内で列車を見送り最後の別れをした。

伊東のホームステイを無事終えて暫くしてGuni Idさんからお礼のメールが届いた。

全文を紹介しますのでご覧ください。

このように先方から感謝の気持ちを頂く度に、外国人と交流して良かったなあ、と嬉しく感じる。

今回活動に参加して下さったISGGの主原会長及び会員の皆さん大変ご苦労様でした。ここに改めて皆さんに謝辞を表します。

Dear Mr. Konishi

On behalf of People to People Denmark I would like to send you best wishes and say THANK YOU for hosting our members.

It was our first time in Ito, and what an experience we have shared with you and your chapter.

We all really enjoyed the morning with kimono, ikebana, origami and koto – it was amazing how we all felt special wearing kimono. It was once in a lifetime for my members.

And what an experience to go to Mt. Omuro – Danes have never seen a volcano and never climbed one – thank you for taking us. And the view to Mt. Fuji in the sunshine completed the day - and we remembered no to speak “too positive” about Fujisan from Mt. Omuro!

Cooking together was also a fun thing to do and sharing to food with friends was a special experience. We also enjoyed visiting the home for the elderly people. We all thought it was good for us with exercises before the long flight back home again.

Thank you for homestay, driving and your efforts in making our homestay perfect.

Thank you for coordinating and guiding us.

Best regards

Gunild Bogdahn.



## 3 5 日間航空機世界一周の旅

(後編)

野満 勝二

(前編 Newsletter No 116 からの続き)

9月23日、宿泊のみのシカゴを経由、カナダのトロント、その主目的であるナイアガラの滝を目指すこととなったが、いずれの交通機関を選択するか、日本出発直前まで特定できなかったが、ひとまず電車でスタートする予定でターミナルに向かった。その場で、ナイアガラに向かうルートとして、とりあえず空港から鉄道ルートを利用するチケットを購入することとし、女性スタッフに購入方法を尋ねるために声をかけた。その女性は東洋系で、ネームプレートを見ると「K i r i k o」となっており、「小

谷桐子」さんという日本人とのことであり、奇跡的、運命的な出会いとなった。

桐子さんによると、バスの移動が最も効率的であるとのこと、しかも、バスの乗り換え地点に自宅があるとのことであり、たまたま退勤時刻でもあったため、途中まで同行いただき、その後のルートも親切に教えていただき、無事にナイアガラ付近にあるホテルに着くことができた。佐賀市出身の中学校英語教師であり、ALTとして赴任中の御主人ペリーさんと結婚し、カナダに渡ったということであり、いただいた親切を忘れがたく、帰路にオフィスに立ち寄った。その日は不在で、メールアドレスを渡していただくよう他のスタッフの方に依頼した。その後メールをいただき、連絡を取り合うに至った。当夜、ライトアップされたナイアガラを楽しみ、翌日には、ずぶ濡れになりながらも船でのナイアガラ観光を堪能することができたのも彼女のおかげだと感謝しているところである。

9月25日、空港近くのホテルまで移動、宿泊し、翌26日、ダラス経由ロンドンに向かったが、アメリカン航空からブリティッシュエアウェイズにトランジットしたことも影響したのか、ヒースロー空港に我々の荷物が届かなかったアクシデントが発生。不着担当窓口でホテルまでの搬送依頼手続きを行い、地下鉄でホテルまで向かった。アメリカとは異なり、ホテルまでのルートがきわめてシンプルでわかりやすく、容易に到着することができた。周囲に高層の建物もなく、落ち着いた町のたたずまいで、フロントもアットホームな雰囲気、翌日には無事にトランクも届けられ、3日間のホテル滞在をエンジョイした。



ナイアガラの滝

この間、ウェストミンスター寺院、バッキンガム宮殿、ビッグベン、ロンドン塔、ロンドンブリッジ、大英博物館など、定番の観光コースを歩き回り、大英帝国の歴史的建造物などを駆け足でめぐった。時折、路上の物乞いの姿に接し、「ゆりかごから墓場まで」と言われた福祉国家の現実の姿には複雑な思いを抱いた。

9月30日、アテネに向かう。空港から乗り込んだ電車の中で、行楽地帰りと思われる父子と相席になり、ホテルへのルートを尋ねたところ、ホテル近辺まで案内していただいたよい思い出もあるが、乗り換えた地下鉄の車内でスリに会い、クレジットカード2枚と、1万円ほどのキャッシュを盗まれたようである。両手で重いトランクを支えていたため、前のバッグが無防備になり、一味と思われる集団による被害だと想定された。翌日、トラベルポリスの事務所を訪問し、被害届を出したが、はっきりなしに同様の被害者と思われる旅行者が、青い顔をして続々と訪れていたことからして、起こるべくして起こったアクシデントと思われる。同じバッグに入れたあったパスポートが無事であったことは不幸中の幸いであり、パスポートまで奪われると、行程そのものが立ち往生することとなり、胸をなでおろした。カードに関しては、日本の娘に連絡をとり、カード会社などに対する使用停止措置などを依頼した。カード1枚は使用された形跡はなく、他の1枚は100万ドルのキャッシングが2回求められたようであるが、カード会社としては、きわめて多額であり、不自然だとして拒絶したとのことであった。

トラベルボリスを訪問した際の対応がきわめて冷淡で、アテネ滞在中、多くの場面で、特に公の職務を担うスタッフに対しても同じ印象を持ったが、国民性を否定しないものの、財政破綻により EU からの財政援助を受けるに至った国の怠慢、諸施策の破綻も遠因ではなかったかと思われる。最後に訪れたタイが、まさに「微笑みの国」として世界各地から多くの観光客を呼び寄せていることと対比しつつ、この国の将来に危惧を抱いたところである。2日、パルテノン神殿を中心に遺跡巡りを行ったが、アリストテレス、プラトン、ソクラテスはいまのギリシャを見て何を想うのか、凡人の想像の遠く及ばないところである。

10月3日、イベリア航空にてスペインに移動。機内において、闘牛士を思わせる男性キャビンアテンダントのダイナミックなおもてなしに満足する中、マドリードに到着した。ホテルに向かう中で、駐車場に入り込んだり、入り口がわからず反対方向に行ったりした後、ホテルに到着した。首都マドリードに1泊の後、翌日、電車でバルセロナに向かった。電車が混雑し、20kg以上のトランク2個を頭上の棚に載せざるを得なかったため、他の人の助力を得て押し上げたが、電車の進行中、頭上に落ちてくるのではないかと心配の余り、景色を眺めるなど、念願でもあったヨーロッパ鉄道の旅を楽しむことができなかった。いつの日か、改めてヨーロッパ鉄道の旅を夢見ている当方としては、20kgを荷物棚に持ち上げるだけの筋力確保が課題かなと感じたところである。

翌日、バルセロナのハイライトとなるサグラダファミリアを訪れたが、時折の日本語も含め世界各国の言語が行き交う中で、荘厳な建物内部に魅了され、きわめて荘厳かつユニークなその外観に目を見張った。

10月5日、バルセロナ発マドリードまでの帰路は、往路の教訓を生かし、早め早めの行動により、スムーズに列車に乗り込み、トランク保管スペースを確保することができ、車窓からの移り行く眺めも堪能することができた。あらかじめユーチューブなどでその姿を何度も見ていたが、目の当たりにし、その壮大さには息を飲み、その姿をしっかりと網膜に焼き付けた。

10月6日、ドーハ経由で今回2度目となるロンドンに向かい、日をまたいで経由地のドーハの空港に早朝到着し、世界一豪華なラウンジでの滞在をほぼ12時間満喫することができた。朝、昼、夜とラウンジを利用し、6時間の利用が可能な仮眠用の部屋をオーダーし、ゆったりと過ごした。10月8日午前1時過ぎにカタール航空機でロンドンに向かい、早朝の6時過ぎにロンドンに着いた。前日同様に、睡眠不足であったが、午前中にロンドンのホテルにアーリーチェックインができたため、ゆっくりと休むことができた。

翌々日9日の昼過ぎ、ヒースロー空港からキャセイパシフィック航空に搭乗、香港経由マレーシアのクアラルンプールへ向かった。香港のラウンジで本場の中華料理を堪能し、クアラルンプールで4日間の滞在となった。

アメリカ、ヨーロッパに比較し、マレーシアとタイにおける円の価値は相対的に高く、食事場所もフードコートに格上げとなり、財布と相談することなく、現地の名物料理を楽しんだ。宿泊も、リッツカールトンなど、日本国内では二の足を踏む高級ホテルライフをエンジョイすることができ、ひと時のV

IP気分を味わった。夕刻、ホテルから長距離の歩道橋を活用し、クアラルンプール名物のライトアップされたペトロツインタワーに向かい、イルミネーションの豪華さに魅了された。

10月15日、最終目的地となるタイに向かった。空港までは、ウーバーと同種のGrabを手配した。ドライバーは、プロサッカー選手を目指していたが、膝を痛めたため夢を断念したという敬虔なムスリムの青年であり、1時間ほどの空港までの旅を退屈することなく過ごせた。

当初、タイではなく、インドを予定していたが、予約以後、JALがバンコク発羽田発便にファーストクラスを設定したことに伴い、タイのバンコクに変更したことから、バンコクに向かった。バンコク到着の翌日、市内のバンコック王朝、翌々日、ツアーに参画してのアユタヤ王朝の寺院（ワット）、遺跡群を見学、何体かの新旧の横たわる涅槃像にも対面、象乗り体験も記憶にとどまるシーンとなった。バンコックでは、微笑みつつ、合掌し会釈する姿に多く接し、事前の情報に違わず、心地よく過ごすことができた。

10月19日、JALに搭乗。深夜でもあり、食欲もなかったが、綾瀬はるか似のキャビンアテンダントに勧められた寿司をつまんだ上、翌朝6時の羽田着陸に伴う4時の朝食も予約し、残しては申しわけないと思いつつ、いずれも完食。行程全体を通じ、せっかくの御馳走をタイムリーに味わうことが少なかったように思われる旅でもあった。

今回の旅に当たり、私は、永年、NHK テレビ・ラジオの各英語講座を活用して積み上げたのみの心もとない英語力、妻は持ち前の行動力に物を言わせての情報収集力、行動力と、役割分担を行い、まさに二人で一人前体制の中、時に意見の衝突もあり、小競り合いもあったが、何とか締めくくることができたように思う。

特に、先導役としてのホテル、交通機関の手配予約、観光に係る各種データは妻が収集、作成し、私も私なりにシミュレートしていたが、航空機の電子チケット、宿泊予約データなどが妻のスマホに收藏されることとなり、写真撮影にも利用し、グーグルマップを活用してのルート検索など、常に右手にスマホを携え、スマホに全面的に依存して行動せざるを得ない姿に接し、最たるアナログ人間である私としては、悪漢に強奪されたり、高所から落とすというようなことがあったとすれば、それこそ、その場で旅が立ち往生してしまうのではないかとこのことを終始懸念していたので、何事もなかったことに胸をなでおろした。

なお、今回の旅行に際し、航空運賃は、予約後のルート変更に伴う諸費用なども含めトータルで116万円、円安にもかかわらず、金額を抑えた結果、宿泊料、食事代、観光施設入場料金などをトータルすれば、当初想定した一人200万円の範囲内に十分に収まったと思われる。羽田・ニューヨーク間のファーストクラスわずか一フライトの航空運賃と比較しても格段に廉価であり、それぞれ価値観の違いはあるが、人生最後の、最高に贅沢な旅行であるとしても、目の玉が飛び出る額ではないことは言えるのではないかと考えている。

旅行中に獲得したフライ・オン・ポイントも、時限、特例的に、通常1.5倍のところ、2倍の加算がされる措置がJALから打ち出されたこともあって9万ポイントを超えたことにより、航空機利用の

際のさまざまな優遇措置が継続することとあわせ、二人で14万5,000マイルを獲得でき、これまで積み上げてきたマイル数を加算すると、ビジネスクラスでの再度の世界一周が可能と思われる。このようなことを考えあわせると、決して高額な旅行ではないと認識しており、行かないことの後悔はあっても、行ったことの後悔はないことを付言しておきたい。

## 【新入会員紹介】

Sayaka LAÎNÉ レネ 紗矢香



Hi! I'm Sayaka, living in Ito with 2 kids since 2016.

I'm from Hokkaido and used to live in Tokyo 16years.

I'm singer, writer and designer and party people.

My hobby is “茶道” (Japanese maccha green tea ceremony) , “香道” (Incense ceremony) , skiing and traveling.

I hope to see you everyone and enjoy talk together !



よろしくお願ひします♪

## 【事務局便り】

6月、7月、と酷暑の毎日が続いています。40℃に近いこの暑さは、今まで日本では経験のないこととか。心なしか、日中、街中を歩く人も車も数が少ないような気がします。

我が善意通訳の会は、この暑さにもめげず、恒例のいちごサロン(5/11、6/8、7/13) 英語サロン (5/25、6/22、7/27) K'sサロン (5/9、6/13、7/18) を開催してきました。

いちごサロンでの主な議題は、20余年前に作成された「会則」を、会長の交代を機に見直すこと。目下改定中。英語サロンでは、6月22日にALT Conar の歓迎会、7月27日に、ALT Kyle の送別会、その他5月12日主原宅にてALT Katie の送別会を行いました。

5月19日は下田市恒例の黒船祭が開催予定でしたが、あいにく、当日、海が荒れて水兵さんたちが上陸できず中止になりました。そのため、当日早朝出掛けられた5名の伊東市善意通訳の方がたは途中で引き返すことになりました。

また新しく レネ・紗矢香さんが入会くださいました。

## 【編集後記】

真剣に心より「暑中お見舞い」と「残暑お見舞い」を合わせ申し上げます。

この猛暑の中、ご寄稿くださいまして、厚く（暑く）お礼申し上げます。

先ずは、主原新会長の就任のご挨拶、ご本人のプロフィール、抱負を拝読いたしました。

今後ともよろしくお願い致します。

そして 稲葉尚子前会長、長年に亘りお世話様でした。

さて菊池さん、いつもながらご寄稿有難うございます。

今回の 「Sixth Sense」。

新年早々、日本で急逝されたフィリピンの社員の方、菊池さんの手厚いケアが

目に浮かびます。

菊池さんの誠意がきっと故人の心を動かし、LAのご親戚の第六感に働きかけたのでは。お盆も近い今日

この頃、ふとそんな感じが脳裏をよぎりました。

小西さんの「デンマーク人のホームステイ」に関するお話。

久々に「我等、ISGGの出番だよ！」と言った話題です。伊東の名所案内

生け花、琴、着物の着付け、茶道などの日本文化紹介、料理教室の体験と4日間に及ぶ交流を、詳しく

レポートして下さいました。 将にISGGメンバーの本領発揮の模様を、目の当たりにしました。

野満さん、2回に及ぶ大作に感謝いたします。

さて、アメリカからカナダへ、再びアメリカからイギリス、ギリシャ、スペイン、またイギリス、香港、

マレーシア、タイ、日本と文字通りの世界一周。

「渡る世間に鬼は無い」と「人を見たら泥棒と思え」の諺も当てはまるような体験談など、興味津々で  
読ませて頂きました。 円安で、海外旅行もままならぬ昨今、楽しく且つ有意義なお話でした。

レネ 紗矢香さん、新入会のご紹介文、有難うございました。

多彩なご趣味も活かして、今後のご活躍を期待致しております。

編集部では皆さんのご寄稿を心よりお待ちしております。

次号もぜひ宜しくご協力のほど、お願い申し上げます。

T.K 記 (tea & cake)

伊東市善意通訳の会 (ISGG)

会長 主原 一雄

(事務局) 〒413-0232

伊東市八幡野 1324-40 主原 一雄

e-mail : larryn@estate.ocn.ne.jp

http://itosgg.info/

(編集委員) 稲葉尚子、曾我廣子、加藤達雄